# オルテガの倫理学

大　町　　公

今世紀スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセ（1883～1955）は倫理学についてのまとまった著作は一冊も残していない。それは彼が倫理学に関心がなかったからではない。倫理学の本を書きたい由は何度か表明している。

彼は「人間には時代が直面する問題に取り組む義務がある。これは疑う余地がない。私はこれまで一貫してこの義務を果してきた」[1]と言う。彼が直面したのは人間がもはや伝統的な意味で人間とは呼び難い現実であった。彼は時代を診断し，警告した。現代では人間が「大衆化」している。倫理的規範がなくなったのではなく，人間がどんな規範にも従おうとしないといった危機が現れている。オルテガはかかる現実の前で思索を始めねばならなかったのである。

彼の出発点は常に現実である。「自分の『理想主義的傾向』を嫌悪し，それとはこれまでもずっと戦ってきた」[2]現実主義者であった。彼は『大衆の反逆』(1930)の中で現代の人間をつぶさに検討する。彼が頭を痛めたのはいわゆる倫理学ではなかった。人間がいかにして再び人間に戻るかであった。オルテガにとってはそれこそが「時代が直面する問題」であったのだと解すべきであろう。結局彼は唯一つの倫理しか唱えなかった。「自己自身であれ！」。われわれはまずそれを糸口に，オルテガの言わば＜危機の時代の倫理学＞なるものを見てゆくことにしよう。

## 1. 唯一つの倫理

「個人であれ集団であれ，一つの存在が充実してあるための必要にしてかつ十分な唯一つのこと，それは即ち存在をそれ自身の真理の中に置くこと，存在にそれ自身の真正さを与えること，そしてわれわれの勝手な欲望によって存在の仮借ない運命を偽造し，非本来的なものにしようとはせぬことである。」[3]

18世紀の進歩主義者以来，人々は人間は＜かくあるべきである＞と言う。＜こうであってはならない＞という言い方をする。かれらは事前に現実を，現実の不可

避的な諸条件を丹念に分析することなく，いきなり自らの理想を提出する。人間は<かくあらねばならない>，と。言うなれば魔術的倫理である。彼らは現実の上に夢を織ろうとしている。現実的なものを，望ましい抽象的なもので置き換えようとするのは思考の怠惰である。人間には道徳だけでは律し切れないものがある。実現を望むならば，望ましいだけではいけない。現実が許容するもの，現に可能なものだけが望ましいのである。

オルテガは言う。

「われわれは魔術的倫理には背を向けて，唯一つの承認しうる倫理を採用しよう。それは今から26世紀も前に，ピンダロスが『自己自身であれ』というかの有名な命法にて要約したものである。」(4)

われわれは人間として様々な条件を負わされている。それらは「仮借ない運命」である。運命ならば，進んでこれを引き受けようではないか。人間は天使になれない。なれないことを悲しむばかりではいけないのである。「われわれは生まれながらに不完全ではあるが，その限りにおいて完全なものとなることにしよう」。(5)

それでは，われわれはまず人間という現実の不可避的な諸条件，即ち人間に課された運命を，現代の危機との関連で見ていくことにしよう。人々がいかなる規範にも従おうとしない。現代の危機とはそのような特色を持つものであった。

## 2. 文化と「生」

『大衆の反逆』に先立つこと7年，オルテガは『現代の課題』(1923年)をものした。それによれば，人間の「生」は生(命)的側面と文化的(あるいは精神的)側面の双方を持つ。人間は二つの異なった力の支配を受けている。「生は文化的でなければならず，文化は生命的であらねばならない」。(6) 人間は互いに制限し合い，修正し合う二つの要請にかかわらねばならないのである。両者の均衡がくずれるならば自ら退廃が生じよう。文化のない「生」は野蛮であり，「生」との接触を欠いた文化は屈従である。

「生」から遊離した客観的命法は主観的命法によって補塡されなければならない。ある理念を人間が支持するためには，客観的に真であるだけでは十分でない。その理念がわれわれの内に確固たる信念を生ぜしめるものでなくてはならないのである。このような信念が生まれないなら，理念の方を修正すべきである。「幾何学的に完

全ではあっても，われわれによそよそしく，われわれを行為へと駆り立てない道徳は主観的には不道徳的である。倫理的理想はそれが非常に正確であるというだけでは十分ではない。その理想はまたわれわれの行為衝動を上手に誘発させるものでなければならないのである」。

われわれの諸活動はかかる「二重の命法」によって支配されている。図式化すればこうである。

| | 命 | 法 |
|---|---|---|
| | 文化的 | 生(命)的 |
| 思考 | 真 | 誠実 |
| 意志 | 善 | 行為衝動 |
| 感情 | 美 | 快 |

(8)

そして，「生」の命法を包括するのは「自己自身への誠実」という命法である。この命法を知っていれば，規範とその実践との間に分裂を起こすこともなかったであろう。一般に妥当であるとみなされている倫理的理想が，現に自分の内奥を振わせ，行為へと鼓舞しているのかどうか，われわれは常に明確にしておかなければならないのである。文化とはもともと「生」そのものから生まれたもの，自発性であり，主観性であった。倫理的規範もまたしかり。いったん出来上ったものはしだいに主観から独立し，独自の存在，価値，権威を主張していく。今では創造した「生」自身が，それらの前にひざまずき，降服し，奉仕しているではないか。文化は己れを客観化し，文化を生んだ主観に対立する。しかし，「生」と文化の対立，主観との隔りは一定の限界内に止めなければならない。文化が生き続けるためには主観より絶えず生命を与えられねばならない。この供給が断たれるならば文化は自と石化し，硬直化し始めよう。現代は文化に対し，誠実が，自発性が，「生」の力が立つべき時なのである。

繰り返せば，人間は二つの命法の支配を受けている。文化的と生（命）的，二つの命法である。倫理的規範も当然この双方に従わねばならない。規範は単に客観的に正しいだけではいけない。同時に人間に行為衝動を誘発させるものでなくてはならない。これまでは客観的側面のみが重視されてきた。今は「生」そのものに目を

向けるべき時である。

次章において，われわれは人間の「生」について，オルテガの考えを追うことにしよう。

3. 人間の「生」

生きるとは常に何事かをなすということである。人間に「生」は与えられている。しかし，それは「出来上ったもの」ではない。作り上げねばならぬものである。「生」とは「課題 quehacer, task 」に他ならない。それも特定の事ではない。人間はその各々がいつも「次の瞬間自分のしようとする事，なろうとするもの」を決断しなければならない。オルテガの言う「生の計画」である。「生の計画」を案出するのは知性，わけても「想像力」の働きである。人間は想像力によって「生」を計画していく。言わば人間は「自己を創作する小説家」である。

言い換えれば，人間はいつも自分の未来を先取りしなければならないのである。しかもこの時にはあらかじめ自らの生涯をも先取りしている必要がある。(長期的)目標である。この目標がなければ当座の計画も立てられない。この決断は他人に譲り渡すことはできない。肩代りしてもらえない。なぜなら，たとえ他人の言うままになるとしても，それ以前にそう決断していなければならないからである。

さて，人間はいつも「生の計画」を立てなければならない。しかし，そうするためには人間は誰でも，自己とは何であるのか，環境とは何であるかの確信を持っていなくてはならない。世に言う「確信の無い人」とは単に言葉の上のことにすぎない。懐疑論者といえども「あらゆるものは疑わしい」と確信しているのである。

「生」は課題である。では，この課題はいかにして十全に果されるのか。満足すべきどのような条件が待ち受けているのか。

人間は好むと好まざるとにかかわらず，次の瞬間自分のしようとする事，なろうとするものを決断しなければならない。この決断は他の誰にも肩代りしてもらえない。自分の歯痛は自分だけが痛い。私の苦しみは私自身がなんとかしなくてはならない。「生」とは各人それぞれの「生」であり，人間は「生」が要求する課題を各々が負わねばならないのである。

決断するのに必要な自己と環境についての確信もまた自分自身が確信していなく

てはならない。誰か代りに確信してもらうわけにはいかない。このように人間は自らの「生」を一人で引き受けなければならないのである。「生」とは「根本的孤独」である。

「生」は孤独である。いや根本的孤独である。いかなる時も唯一人で決断しなくてはならない。では，この決断はどのようにしてなされるのか。

オルテガは言う。

「あらゆる生は『自己を計画する』。同じことだが，われわれが個々の行為を決断する時そうするのは，その行為が与えられた環境の中で最善のものと思われるからである。即ち，あらゆる生は好むと好まざるとにかかわらず，自分自身の目の前で自己を弁明しなければならない。自己自身の前での弁明は生を構成する要素である。それゆえ，生きるということが計画に従って行動することであると言うのと，生が不断の自己弁明であると言うのはひとつの事である。」(9)

これによれば，「生」それ自体に選択する能力がある。ひとつのものを他よりも善しとする働きがある。それでは，あるものを「最善のもの」とする判断はいかにして成立するか。「自己弁明 justificarse, self-justification」はどのようにして可能なのか。

オルテガによれば，ある意見が「真に自分のもの」であったり，それを「十分に納得」するのは，その意見を「その根底から考えて，その意見が他と比較にならないほどの明証性に助長されて自分の内に現れた場合」(10) だけである。この「明証性 evidencia, evidence」なるものは，誰もその人に「出来上ったもの」として与えることはできない。その人自身が問題を一人で引き受け，それに対する確信を自ら形成する時にのみ自分の内に生じるものである。

こうして出来上り，自分が「十分に納得している」意見が「真に自分の意見」であり，そのような意見は「当の問題について自分が実際かつ正真正銘考えている内容を含んでいる」。(11) 人間は自分の真正の考えを考える時，「自己と一致している」，あるいは「自己自身である」。その考えの下になされる一連の行為，「生」は「真正の生」である。オルテガにおいて「真正の生」とは即ち道徳的「生」の意でもある。人間は自己自身であるためには，あるいは道徳的「生」を営むには，自己に沈潜しなくてはならない。言い換えれば，自己の内に入り，可能な意見，行為のう

ち，いずれが真に自分のものであるか自ら明らかになるまでじっと待たねばならないのである。

4. 自己沈潜 ensimismamiento, being in one's self

オルテガによれば，人間が「自己に沈潜する」ことを可能にするものは「注意力」である。「われわれが注意を向ける所，そこにわれわれはある」。[12] 人間は注意を内側に向けることができる。この能力のお蔭で，人間は一時的にせよ環境から退き，自分の「内部」に入り込むことができる。自己に沈潜することができるのである。

人間が確信を作り，「生の計画」を案出するにはこの自己沈潜が不可欠である。再び外部へと目を移す時，今度は人間は確信を持っている。単に環境のなすがままになっているのではなく，拠って立つ場を持っている。言い換えれば，環境に対し何らかの態度を取ることができるのである。

オルテガは注意を内側に向けられるという，「この一見単純そうに思える能力こそが，人間を人間らしくしうる能力なのだ」[13] と言っている。このことは他の動物と比較すればよくわかる。動物の注意は常に外側に向けられている。つまり動物は常に外にいる。永遠の「他者」なのである。言い換えれば，動物は「内部」を持たない。それがゆえに「自己」なるものをも持たない。その結果，動物は絶えず「自己疎外 alteración, being beside one's self」の状態にあり，あわて，うろたえているのである。

しかし，このことはまた，注意を向ける方向いかんによっては，人間も容易に動物の段階へと転落する可能性のあることを示している。オルテガによれば，現に歴史上「自己疎外」のあまり，人間が人間らしさを失うといった現象は一再ならず起った。オルテガはこの現象を人間の「再野蛮化」と呼び，歴史的危機の明確な徴候の一つに数えている。

さて，人間は自己に沈潜することにより，自己自身となり，自己と一致することができる。真に自分の考えを考えることができ，「真正の生」を営むことができる。ここで注意したいのは，『ガリレオをめぐって』第7章の章名「自己との一致としての真理」である。なぜ自己と一致することにより，あるいは自己自身となることによって真理が得られるのか。自己の中に何が隠されているのか。『現代の課題』

第10章を中心にオルテガの真理観を確かめておくことにしよう。

## 5. 真　理

異なった視点から二人の人間が同じ風景を眺める。にもかかわらず双方は同じものを見ない。位置が異なっているので，風景は双方の前に違った風に編成される。一方にとっては前景を占め，その細部をすべてはっきりと表しているものが，他方にとっては後景にあり，あいまいでぼんやりしている。その上事物が前後ろになるので，その全体ないし部分が隠れることになり，一方は風景のうちの他方には届かない部分を知覚することになる。

この場合，二人の見る風景が相違するからといって，どちらか一方の風景が偽りであるとは言えない。またどちらの風景も偽りであり，別に「真正の風景」なるものがあるとも言えない。どちらの風景も真である。

オルテガは言っている。

「宇宙の実在はある特定のパースペクティブ（遠近法）の下でのみ見られうるものである。パースペクティブは実在の構成分子の1つである。パースペクティブは実在を歪曲するどころか，実在を編成するのである。いずれの地点から見ても常に同一のものである実在とは不条理な概念である。」(14)

オルテガはこのパースペクティブを認識の領域においても適用する。彼の認識方法がパースペクティビズムと呼ばれる所以である。ただしここでは「いずれの生も宇宙に関する視点であ」(15)り，「パースペクティブとは実在を省察する人に対して実在がとる秩序と形式である」(16)とされる。

つまり，ある実在に関して二つの「視点」（主観）が捉える真理は相違している。が，いずれも真理である。また，それら二つの視点から全く独立して真理なるものはありえない。言い換えれば，「実在は風景のように，すべてが同様に真実かつ真正の無数のパースペクティブを持っている」(17)が，実在は一つの視点に対し，その無数のパースペクティブのうちのたった一つのパースペクティブしか受け入れない「認識装置」である。唯一絶対のものであろうとするパースペクティブは偽りのパースペクテイブである。即ち，「局限されず，『いかなる場所からも見られない』真理，つまりユートピアとは虚偽である」(18)ということになる。

それゆえ，異なる二つの視点が捉えた真理は，もしそれらが共に真理であるなら

相違していなくてはならない。この相違は，矛盾をではなく，「補足 complemento, complement」を意味するのである。ここから，あらゆる個体，即ち，すべての個人，世代，時代，民族がかけがえのない認識装置ということになる。

そして，オルテガは「完全な真理は，私が見るものと隣人が見るものをといった風に，次々と連結することによってのみ獲得される」[19]と言い，神もまた一つの視点であるとして，パースペクティブの総計を神の能力に帰している。

## 6. 回　心 conversión, conversion

自身の真正さを得るには，あるいは真理の中に身を置くにはまず自己に沈潜しなければならない。沈潜し，自己自身と厳しく一致することである。自らのパースペクティブに誠実たることである。現代という危機の時代でもそうなのか。こういう時代でも可能なのか。

オルテガによれば，危機の時代には人間にある不思議な「転倒 vuelo, shift」が起こる。言う所の「回心」である。[20]

「回心とは人間がある観念から別の観念へと移る変化ではなく，ある全体的パースペクティブからそれとは逆のパースペクティブへと移る変化である。・・・・自己を見失っていた人間はこの回心によって，突然自分が自己を発見したことに，そして自己と一致し，自分自身の真理の中に完全にいることに気がつくのである。」[21]

人間は「回心」によって自己を発見し，自己と一致する。自己の真理の中に生きる。かくして人間は危機脱出の端緒を得ることになる。

オルテガは危機を歴史的に考察し，脱出の方法を検討した。『ガリレオをめぐって』（1933年）一著がそれである。彼が得た結論はこうであった。

「・・・『回心せよ』との声，私流に言えば『自己に沈潜せよ』，諸君の真の自我を探し出せとの声が，今日再び人々に，とりわけ若い人達に急いで伝える必要のある声だということには何の疑いもない。」[22]

これまでヨーロッパを襲った二度の危機[23]においてはいずれも人間は回心により再び自己自身となることができた。自己との一致を果たせばこそ，真正の文化が甦ったのである。オルテガは次代をになう若者にそれを期待した。当然であろう。

オルテガの予想に従えば，近い将来若い人達の間に回心が起こるはずであった。新たなパースペクティブの下にものを見る青年達が登場してこなければならなかった。今日事態はそうはいっていないのである。

『大衆の反逆』によれば，大衆とはいわゆる労働者大衆をさすのではない。特別な資質を持たぬごく平均的で凡庸な人間のことである。大衆は必ずしも集団である必要はなく，一人でも「大衆人間 hombre-masa, mass-man」（いい訳語とは毛頭思わないが，こうとうでも訳す他はあるまい—筆者注）と呼ぶことができる。彼は彼個人の中に大衆そのものの在り方を体現している。大衆はこれまで自らをわきまえ，選ばれた少数者に従ってきた。彼らの作り出した文明の原理，規範を受け入れてきた。しかし今日大衆は反逆する。選良達の指導を拒絶するのである。

現代の大衆人間は物心が付いて以来，生きることは容易で，可能性にあふれ，なんの限界もないと感じている。歴史的に見るならば，彼らは19世紀の文明，即ち自由主義的デモクラシーと科学技術の発展が生んだ鬼子と言えよう。彼らはあるがままの自分に満足し，外からの声，働きかけ，審判にはいっさい耳を傾けない。己れの意見を疑わず，他人の存在を考慮に入れようとはしない。今日の大衆人間は「不従順」と「自己閉鎖性」とから成り立っているのである。彼らは世界には自分の同類しかいないかのごとく，なんの遠慮，手続き，反省もなく，言わば直接行動によって自分の意見を押し付けようとする。彼らは甘やかされたお坊っちゃんであり，文明の中にあって未開の野蛮人である。

オルテガは必ずしも楽観していたわけではない。『大衆の反逆』出版7年後，同書仏訳に付した「フランス人への序文」の中で自問している。「この型の人間（大衆人間—筆者注）を矯正することができるだろうか」，[24] と。彼らの欠陥が矯正されなければ，必ずやヨーロッパは崩壊するであろう。「救いの可能性のすべてがかかっているいま一つの問い」としてこう問う。「大衆がかりに自ら望んだとしても，いったい彼らは個人的な生に日ざめうるだろうか」，と。[25]

危機から脱出し，新しい文化を形成するためには，現代の人間も回心せねばならない。もし回心することがなければ，ヨーロッパは早晩亡びることになろう。それにはまず自己に沈潜することである。そうすれば自分の内奥からかすかな声が聞えてくるであろう。そのか細い声に耳を澄ますことである。われわれに何かを教えて

くれよう。自己に沈潜せよ！自己自身となれ！この命法にこそヨーロッパの存亡がかかっているのである。

## 7. 使　命 vocación, vocation

人間は常に自分の未来を先取りしなければならない。「生の計画」を案出しなくてはならない。通例，人間の前には数多くの可能性が開かれている。人間はこの中からたった一つを選び取らねばならない。選び取ろうと思えばそのいずれをも選び取ることができる。その意味では人間は＜自由＞である。しかし，いくつか選択可能な「生の計画」を前にする時，「どこかしらわれわれの内奥の深みから聞えてくる不思議な声が，われわれにそれらの中の一つを選び，他を排除するよう呼びかける」。[26]「一つのものが，たった一つのものだけが，われわれのなるべきものとしてわれわれの前に現れる」。[27] この不思議な声が「使命」と呼ばれるものであり，これこそがわれわれを「真正の存在」へと導くものである。このような声は誰の内部でも聞えている。たいていの人間はそれを聞こうともしないのである。しかし，「自分の使命を生きる者，即ち自分の真の『自己』と一致する者だけが自己自身を生き，真に生きているのであ」[28]り，それ以外の者は自らの「生」を偽っているのである。

ヨーロッパの存亡すらかかっているという「使命」。そのまことか細い声は次のようにして聞かれよう。

「・・・各人が未来を予見しうるのは，外部に目を向けることによってではなく，むしろ自己の孤独の淵を厳しく点検することによってである。」[29]

## おわりに

『大衆の反逆』が出版されて16年後，マックス・ピカートは『われわれ自身のなかのヒトラー』（1946年）の中で，今度は人間は「アトム化 Atomisierung」したと警告した。人間はもはや「内的連関性」も「内的連続性」をも喪失したと述べたのである。

われわれ自身とて無関係であろうはずがない。自らの内面（それすらあるかどうかわからないが）をのぞく時，その殺伐たる様相に慄然とする。社会は己が心を写す鏡なのである。そういう筆者が倫理について云云する。アトム化した世界ならで

はの光景かもしれない。たとえわずかな時間でも，内的連続性なるものを獲得するには，何か量り知れない精神力を必要とする。孤独を維持するにも，拡散しようとする自分を必死で押し止める極度の集中力が必要となる。今日，<使命>とか<内奥からの声>といった言葉はほとんど死語にも等しかろう。死語にも等しいという現状こそ，今なお新たな確信が芽生えてはいないことの何よりの証明でもあろう。だが，・・・・・とにかく（何とも便利な言葉だが）すぐれた先達の言葉を信じて，たとえわずかな者だけでも今しばらく，自らの内面をば注視しようというのが，拙論の結びとも言えない結びである。

（昭和56年8月）

注

(1) Obras completas de Joś Ortega y Gasset, Revista de Occidente, Madrid, 1961－1969. Ⅳ, 130.（ローマ数字は巻数を，アラビア数字は頁数を示す。以下同じ）

(2) Ⅳ, 119.

(3) Ⅳ, 314－315.

(4) Ⅲ, 102.

(5) Ⅲ, 102.

(6) Ⅲ, 169.

(7) Ⅲ, 171.

(8) Ⅲ, 171.

(9) Ⅳ, 342.

(10) Ⅴ, 72.

(11) Ⅴ, 73.

(12) Ⅴ, 75.

(13) Ⅴ, 75.

(14) Ⅲ, 199.

(15) Ⅲ, 200.

(16) Ⅲ, 236.

(17) Ⅲ, 200.

(18) Ⅲ, 200.

(19) Ⅲ, 202.

(20) 『ガリレオをめぐって』によれば，「歴史的危機」とは「前世代の世界即ち確信体系に，人間がそれらの確信無しに，つまり世界無しに取り残されるといった生の状態が続く時」，人間の「生」が取る様式を言う。その様式は当初の「方向喪失」から「絶望」へ，そしてさらなる深化と共に，「境界線」上にある「生」と呼ばれるものが現れる。歴史的に見るならば，危機とは人間がある確信体系を頼りにして生きることから，別の確信体系を頼りにして生きることへの移行である。ある世界を離れ，それとは別の世界にたどり着くまでの期間を言う。危機の間に，それまでの世界を捨て去ること，新しい世界になじむこと，この二つのことが人間によって行われていなければならないのである。

境界線上にある「生」を生きる人間は，自分は「二つの生形成，二つの世界，二つの時代の境界線上にいるとの感情」を抱いている。人間は二つの世界の間に立って，決断できぬままその間を行ったり来たりする。身は二つの世界に引き裂かれるのである。そして，さらに時代が進めば，「自分は生まれ変ろうとしているとの純然たる予感や期待」を持つ人間が登場する。「回心」が起こるのは，今の用語を使うならば境界線上の「生」を生きている人間である。

(21) Ⅴ, 116.

(22) Ⅴ, 116.

(23) オルテガの言葉をそのまま借りれば，「古代世界と共に終わる危機」と「ルネサンスの危機」である。オルテガは前者をB.C.1世紀からA.D.5世紀後半。後者を1350年ないし1400年から1650年までと考えている。

(24) Ⅳ, 131.

(25) Ⅳ, 132.

(26) Ⅴ, 138.

(27) Ⅴ, 138.

(28) Ⅴ, 138.

(29) Ⅴ, 140.

（おおまち　いさお　立命館大学非常勤講師）